



説教要旨「世間の目は恐ろしい」

使徒言行録5章12～5章32節

イエス様を救い主だと信じる人々は、互いに助け合い、支え合い、その人数を増やしていきました。その勢いに危機感を抱いたユダヤ教の指導者たちは、使徒たちを捕らえて、投獄しました。しかし、「夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し」（19節）たのです。翌朝、牢の戸には鍵がかかったままで、その前には番兵が見張りをしていたにもかかわらず、牢には使徒たちの姿がありません。この事実で大祭司らは当惑し、「どうなることかと、使徒たちのことで思い惑った」のでした（21～24節）。

牢屋から出た使徒たちは、安全な場所へと逃げ出したのではなく、神殿で、「イエスこそ神が遣わしてくださった救い主だ」と人々に教えていました。結局、すぐに捕らえられることになるわけですが、大祭司の脅しにも屈することなく、「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」（29節）と、力強く宣言するのです。

一方で、使徒たちと対照的に描かれているのは、使徒たちを捕らえに来た守衛長たちです。彼らは「民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった」（26節）のでした。それは、神ではなく人を恐れているためです。

わたしたちは、神を畏れているでしょうか。それとも人を恐れているのでしょうか。「隠れたことを見ておられる」神をこそ恐れ、その神から豊かな愛が注がれていることという信頼の中で、使徒たちは人を恐れて逃げ出すのではなく、そこに踏みとどまって大胆に福音を語りだしました。直面している困難な状況の中で、神が共にいてくださり、必要な助けを与えてくださることに信頼し、大胆に歩み出していく使徒たちの姿がここには描かれています。

神が「隠れたことを見ておられる」ということは、わたしの全て、心の内側まで知り尽くしておられるということだけではなく、直面している困難をもご存じであるということでもあります。そして、必要な助けを必ず与えてくださるのです。このことに信頼しつつ、大胆に証しする群れとして、共に歩んで参りましょう。